

2019年8月4日聖学院教会聖日礼拝説教

「ペトロの涙」

マルコによる福音書 14 : 66-72

菊地 順

今日の聖書箇所は、どなたも良く知っている馴染深いところであると思います。主イエスがゲッセマネで捕らえられ、その後大祭司の許に連れていかれ、ユダヤ教の裁判を受けた場面です。そのとき、弟子のペトロは、大祭司の中庭に入り込み、その様子を伺っていました。そして、その全容をつぶさに見ることになったのです。マタイによる福音書には、「ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで行き、事の成り行きを見ようと、中に入って、下役たちと一緒に座っていた」(26 : 58)と記されています。そのようにして、ペトロはその成り行きのをすべてを見とどけたのです。しかし、判決が出されたとき、ペトロは見つかってしまいます。大祭司の女中の一人がペトロを見つけたのです。彼女はこう言いました。「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた」。この言葉を聞いて、ペトロはすぐさま、「あなたが何のことを言っているのか、わたしには分からないし、見当もつかない」と、その言葉を打ち消しました。ところが、女中は再度、周りにいた人たちに、「この人は、あの人たちの仲間です」と言い出しました。それを聞いて、ペトロは再度それを打ち消します。しかし、今度は、そばに居合わせた人たちが、「確かに、お前はあの連中の仲間だ。ガリラヤの者だから」と言い出しました。そして、それに対してもペトロは、「あなたがたの言っているそんな人は知らない」と言い張ったのです。そして、言い張っただけではなく、「誓い始めた」のです。

この場面は、読んでいるわたしたちにも、身につまされるものがあるのではないのでしょうか。もし、わたしたちが、このペトロの立場であったなら、わたしたちも同じように答えていたかもしれないからです。裁判での判決は死刑でした。「一同は、死刑にすべきだと決議した」(14 : 64)と聖書には記されています。その後、主イエスは、人々から激しい屈辱を受けられました。「ある者はイエスに唾を吐きかけ、目隠しをしてこぶしで殴りつけ、『言い当ててみろ』と言い」、「また、下役たちは、イエスを平手で打った」のです。そうした屈辱を、主イエスは受けられたのです。そして、そのすべてを、ペトロは見ていたのです。そして、そのとき、先ほど見たように、ペトロは見つかってしまい、あろうことか、三度にわたって、主イエスを知らないと言ったのです。

聖書は、その理由を、直接には何も記してはいません。しかし、その理由は、

状況から判断して、明白であるとも言えます。死刑の判決を受けた主イエスの仲間であるということになれば、同様の危険がわが身にも及ぶと考えるのは当然のことです。そして、その危険から逃れようとするのも、人間の本性だと言えます。そうした不安と恐怖の中で、ペトロは主イエスを知らないと言ったのではないのでしょうか。そして、この場面で、そうしたペトロの取った行為を非難できる人は、おそらく誰もいないのではないかと思います。

しかし、この場面をよく見て行くと、ただそれだけであったのかという思いもしてきます。ただ不安と恐怖から、ペトロは主イエスを知らないと言ったのでしょうか。このところに、一つ気になる言葉があります。それは、71節の「呪いの言葉さえ口にしながら」という言葉です。この言葉は、口語訳聖書では「激しく」と訳されているところです。しかし、新共同訳聖書では、「呪いの言葉さえ口にしながら」と訳されています。そして、昨年出版された聖書協会共同訳聖書でも、同様に「呪いの言葉さえ口にしながら」と訳されています。そして、実際にも、この訳の方が原文に忠実な訳なのです。元々の言葉では、ここには「呪う」という意味の言葉が使われています。ですから、新共同訳聖書や聖書協会共同訳聖書の方がそれを忠実に訳しているわけです。つまり、「ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、『あなたがたの言っているそんな人は知らない』と誓い始めた」のです。「呪いの言葉さえ口にしながら」、主イエスのことなどは知らないと言ったのです。しかも、誓って言ったのです。なぜそれほどまでにペトロは激しく主イエスのことを否定したのでしょうか。また否定することができたのでしょうか。それは、それほどまでに、恐怖におびえていたから、とも言えます。しかし、それだけでしょうか。ここでもう一つ気になるのは、ペトロが否定したものです。初めは、女中の言っていることが何を言っているかわからないといって否定しましたが、最後には、主イエスのことを知らないと言っています。いわば、主イエスの存在自体を否定しているのです。そこに、そのときペトロの抱いたもう一つの思いが現われているのではないのでしょうか。それは、絶望です。この否定の言葉には、主イエスに対する深い絶望が滲み出ているとも言えるのではないのでしょうか。

ペトロは、すべてをつぶさに見たのです。主イエスが捕らえられ、裁判にかけられ、そして屈辱を受ける、そのすべてを見たのです。しかし、そこには、ペトロが以前、「あなたは、メシアです」「キリストです」(8:29)と告白した時に抱いていた、そのキリストの姿はなかったのではないのでしょうか。あまりにも予想に反する姿が、目の前に展開されたのではないのでしょうか。それは、予想もしなかった主イエスの弱々しい姿です。おそらく、ペトロのみならず、すべての弟子たちが描いていたのは、もっと勇ましいキリストの姿であったのではないのでしょうか。主イエスは、エルサレムに上るとき、先頭に立って、毅

然として歩み出されました。それは、弟子たちが、「驚き」「恐れた」(10:32)ほどに、気概に満ちたものでした。それは、そのとき、ゼベダイの子ヤコブとヨセフが、主イエスに、「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人をあなたの左に座らせてください」(10:37)と願い出たほどであったのです。弟子たちは、主イエスが、いつの日か、敵対する者たちを打ち負かし、栄光の座に座るにちがいないと確信していたのです。おそらく、ペトロも同じ思いであったと思います。最後の晩餐のあと、主イエスと弟子たちはオリブ山に出かけて行きましたが、そこで主イエスが御自身の最期について話されたとき、ペトロは、「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」(14:29)と語り、また「たとえ、御一緒に死なねばならなくても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」(14:31)と誓いました。それは、主イエスと共に勇ましく戦い、たとえ戦死することがあっても、それすら厭わないという覚悟を語った言葉であったとも言えます。しかし、それは、勇ましく戦う主イエスと共に、ということでもあったのです。

しかし、今、ペトロが、自分の目の前で見た主イエスの姿は、それとは何とか離れた姿であったことでしょうか。勇ましく反論するのでもなく、身の潔白を主張するのでもなく、逆に、言われるがままに、自らを死に渡すような返事をしたのです。そして、死刑の判決を受け、挙句の果てに、さまざまな屈辱を受けることになったのです。そして、それに対しても、ただひたすら耐えるだけであったのです。この主イエスの姿に、ペトロは驚き、そして躓いたのではないのでしょうか。そして、予想もしなかった弱々しい主イエスの姿に、絶望すら感じたのではないのでしょうか。ペトロが「呪いの言葉さえ口にしながら」、主イエスを知らないと言った背景には、そうした絶望の思いがあったのではないのでしょうか。

しかし、そのとき、鶏が鳴いたのです。それは、二度目のことでした。そして、その鳴き声を聞いたとき、ペトロは突然、主イエスの言葉を思い出したのです。「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた、主イエスの言葉を思い出したのです。そして激しく泣いたのです。聖書協会共同訳では「泣き崩れた」と訳されています。正に、体が崩れ落ちるほどに深い悲嘆に暮れて泣いたのです。その涙の中にあっただのは、おそらくは、自分自身に対する深い絶望ではないのでしょうか。主イエスを完全に裏切ってしまった自分自身に対する絶望が、その心の闇をさらに一層暗いものとしたのではないのでしょうか。主イエスに抱いた絶望に、さらに輪をかけるような、自分自身に対する絶望の中で、ペトロは泣き崩れたのです。

この泣き崩れるペトロの姿を、昔から多くの画家たちが描いてきました。有名なエル・グレコも描いています。それは、このペトロの姿に、自分自身の姿

を見たからではないでしょうか。ペトロの涙は、決してわたしたちと無関係な涙ではないのです。それどころか、それはわたしたち自身の涙でもあるのではないのでしょうか。わたしたちも、深い絶望の中で流す涙があるのではないのでしょうか。だからこそ人々は、ペトロの涙に共感し、それを描こうとしてきたのではないかと思います。

最近、非常に痛ましい事件がたくさん起きています。半月前には、アニメ製作所の建物が放火され、35 人もの人たちが亡くなるとう惨劇が起きました。またそれ以前には不注意な運転によって幼い命が奪われたり、凶悪犯によって幼い命が奪われるといった事件がありました。また、実の父親が、暴力をふるう息子を殺害するという痛ましい事件もありました。父親が息子を殺す、そこにはどれほどの嘆きと葛藤と自責の念があることか。そこには、底なしの絶望しか見て取れないのではないのでしょうか。そして、そうしたニュースに触れる度に、どれほど多くの涙が流されているかと思わざるを得ません。深い絶望の中で、人知れず、どれほど多くの涙がながされているか、そのことを思うと、わたしたちの心もふさぎ込んでしまうのではないのでしょうか。

しかし、わたしたちは、もう一つの現実へと目を向けなければならないと思います。それは、ペトロは、泣き崩れたままではいなかったということです。マルコによる福音書には、その後のペトロの具体的な姿については何も記されてはいません。そこで、わたしたちは、使徒言行録へと目を転じなければなりません。そこには驚くべきペトロの姿が描かれています。それは、絶望の中で泣き崩れていたあのペトロではなく、新たに、残された弟子たちのリーダーとして、主イエス・キリストの復活を大胆に語り出したペトロの姿です。聖書は、その姿を、「すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた」(2:14)と記しています。ペトロは、声を張り上げて、人々に語り出したのです。人々が十字架にかけて殺害した主イエスこそ、神が定められた救い主、キリストであり、神は、そのキリストを死人の中からよみがえらされたことを語ったのです。そして、自分たちは、その「証人」(2:32)であると、大胆に語り出したのです。「証人」とは、元々の言葉では「マルトゥス」と言いますが、それはまた「殉教者」という意味の言葉でもあります。英語の「殉教者」(martyr)という言葉は、この言葉から生まれたものです。ペトロは、主イエスの復活についての証人となったのです。殉教者になる覚悟をもって、命をかけて、主の復活を大胆に語ったのです。そのとき、それを聞いていた人たちは強く心を刺されました。そして、ペトロや他の使徒たちに、『兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか』と(2:37)言い出したのです。ペトロの説教を聞いた心ある者たちは、ペトロの説教によって悔い改めたのです。それほどまでに、ペトロの説教には力があつたのです。

しかし、それは、あの泣き崩れた時から数えて、まだ 50 日余りしか経っていない中での話でした。それでは、わずか 50 日余りの間に、ペトロの身の上になんが起こったのでしょうか。何が、絶望のどん底にいたペトロを、その死の淵から生き返らせることになったのでしょうか。それは、言うまでもなく、イエス・キリストの復活です。それが、ペトロが抱いていたすべての絶望と嘆きを完全に取り除くことになったのです。もし、主イエス・キリストが復活していなかったとすれば、おそらく、主イエスの十字架での死は、ペトロの絶望にさらに追い打ちをかけ、終にはペトロの命すら奪ったかもしれません。おそらく、どんな慰めの言葉も、赦しの言葉も、ペトロを癒すことはできなかったと思います。ペトロを立ち上がらせることができたのは、ただ一つ、イエス・キリストの復活だけであったのです。正に、聖書が証しするように、イエス・キリストは、死人の中からよみがえられたのです。そして、弟子たちに現われ、絶望のどん底に沈んでいたペトロにも現われたのです。それは、途方もない出来事であり、誰も信じるのができないような出来事です。しかし、事実、ペトロは、復活した主イエスに出会ったのです。そして、絶望のどん底から救い出されたのです。そして、それ以外には、ペトロを救い出すことができたものはなかったのです。

このとき、ペトロは、復活した主イエスによって、いわばその存在全体が満たされ、その復活の主の力に与る者となったのです。それは、正に、パウロが「生きるとはキリストである」(フィリピ 1:21) と告白したように、主と一つになる命に入れられたのです。絶望という罪の中から救い出され、主と一つとされ、そして主の力によって生きる者となったのです。言ってみれば、ペトロ自身が、よみがえったのです。絶望の中に死んでいたペトロが、復活の主イエスに出会い、その絶望の中から救い出され、主と一つにされたとき、ペトロは、新しい命に生きる者となったのです。復活の力に生きる者となったのです。そして、絶望ではなく、希望に生きる者となったのです。

この出来事は、主イエス・キリストの復活が、正に事実として起こったことを雄弁に物語るものでもあります。正に、主イエスは、よみがえられたのです。だからこそ、ペトロも、絶望の中から救い出されたのです。そして、それは、ただペトロのみならず、他の弟子たちにも、そして悔い改めて洗礼を受けた者たちにも起こったのです。ここに、わたしたちの希望があります。すべての絶望を打ち破る希望があります。そして、この希望に、わたしたちの生きる力があるのです。そして、その希望は、全能なる神に力に与って生きて行く希望でもあるのです。

かつて、弟子たちが、「金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」(10:25) と語られて主イエスの言葉に驚いたとき、主イエス

は、「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ」(10:27)と答えられました。「神は何でもできる」のです、<神にできないことはない>のです。そして、主と一つとなった者は、この力に与って生きる者となるのです。使徒言行録では、悔い改めて多くの者が洗礼を受けたとき、「すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業としるしが行われていたのである」(2:43)と記されています。この希望に与る命は、「多くの不思議としるし」を生み出していくのです。そして、そこには、神にできないことはないという希望に満ちた歩みが伴って行くのです。そして、その希望は、どんな困難も、どんな暗闇も、消し去ることはできないのです。

しかし、この希望は、あえて言うならば、燦燦と照り輝く太陽のようなものではないかもしれません。それは、むしろ、イザヤ書に、「ほのぐらい灯心を消すことなく」(口語訳、42:3)と謳われているような、かすかなロウソクの光のようなものかもしれません。しかし、それは、消え去ることはないのです。どれほどの困難が目の前にあろうとも、またどれほど深い悲しみが満ちようとも、この希望は消えないのです。神にできないことはないという、主の復活に与る希望は、決して消えることはないのです。そして、その消えることのない希望こそ、真の希望なのです。そして、それが、わたしたちが直面するすべての問題に立ち向かう力を与えてくれるのです。そしてまた、この希望があるからこそ、困難に立ち向かっていくことができるのです。

それは、ちょうど、知恵の輪に似ているかもしれません。唐突ですが、皆さんは知恵の輪をしたことがあるでしょうか。最近の知恵の輪には、非常に複雑なものもあり、どうやっても解けそうにないものもあります。しかし、知恵の輪には、一つの重要なルールがあります。それは、知恵の輪は必ず解けるということです。どんなに複雑な知恵の輪であっても、解けないものはないのです。それが、大前提です。もしこの前提がなければ、チャレンジして、なかなか解けないと、途中で諦めてしまうかもしれません。しかし、知恵の輪は、必ず解けるのです。だからこそ、わたしたちはチャレンジすることができるのです。それと同じように、わたしたちの人生において遭遇するさまざまな問題にも、神の解決、神の救いが、約束されているのです。解決するかどうか分からないというのではなく、解決へと導く希望の光があるのです。そして、それに向かって、諦めることなく、希望をもって進むことができるのです。確かに、その解決は、すぐには与えられないかもしれません。しかし、それは、わたしたちの歩みを力づけ、後押しし、導くのです。正に、「傷ついた葦を折ることなく、ほのぐらい灯心を消すことなく、真実をもって道をしめす」(口語訳)のです。そして、この光こそ、復活の主から与えられる力なのです。

わたしたちの人生には、困難な問題があります。どう見ても解決できないよ

うな問題があります。ペトロの涙に示されているような深い絶望があります。しかし、諦めてはならないのです。＜神にできないことはない＞のです。復活の主イエスを仰ぎ見るとき、わたしたちは、この確信を新たにすることができるのです。そしてまた、しなければなりません。

＜神にできないことはない＞、この希望をもって、今週もまた、主のみ前に力強く歩んで行きたいと思います。